

『狂歌江戸砂子集』

(平成六年度報告)

芭蕉記念館所蔵本

『狂歌江戸砂子集』

江東区芭蕉記念館

本年度の報告書は『狂歌江戸砂子集』を取り上げた。本書は、本来、正編（上・下）と続編（上・下）の四冊からなり、当館所蔵本はそのうち続編下巻にあたるものである。

当本は浅草・神田・本所・亀戸など江戸北東部が中心に詠まれている。特に中川や葛西などは文化期刊行本にはみられない地名が題となり、新しく取り上げられた地域である。江戸市民の行楽地の拡がりの意味するのだろうか。また鱧、干海苔などの地域の産物を題としていることは興味深い。

昨今、江戸の文化をもう一度見直そうという動きがでている。国文学や歴史学をはじめとする諸研究のなかで「狂歌」が取り上げられ、本書が役に立てば幸いである。

芭蕉記念館所蔵本

『狂歌江戸砂子集』

（平成六年度報告）第十四集

発行日 平成七年三月二十日

編集・発行人 江東区芭蕉記念館

〒135 東京都江東区常盤一―六―三

TEL 〇三（三六三一）一四四八

印刷所 〒135 東京都江東区白河二―十一―七

川村印刷株式会社



この報告書は、古紙を活用した再生紙を使用しています。

刊行にあたって

当芭蕉記念館は、昭和五十六年四月の開館から十四年目を迎えようとしています。その間、当館の事業も時雨忌大会をはじめ文学講習会やジュニア俳句教室なども軌道にのり、多くの参加者を見るようになりました。

ところで、まもなく、隅田川と小名木川の北詰めの芭蕉ゆかりの地に当館の分館が完成する予定です。分館の屋上には、芭蕉庵のレリーフと芭蕉像を配した史跡庭園があり、隅田川の景勝を臨むこともできるようになります。

さて、年度報告書も今年で第十四集となりました。今回は、『狂歌江戸砂子集』の翻刻資料です。当本は、『狂歌江戸砂子集 続編』下巻にあたる一冊ですが、その狂歌を通して江戸と庶民の生活空間を読みとることができるものと思われれます。本報告書が斯界の参考になれば幸いです。

平成七年三月

目次

刊行にあたって 1

芭蕉記念館所蔵本『狂歌江戸砂子集』について 3

芭蕉記念館所蔵本『狂歌江戸砂子集』 9

・凡例 10

・『狂歌江戸砂子集』 11

不忍の池 12

向か岡 12

根津 12

下谷 12

三絃堀 12

根岸 12

坂本 12

蓑輪 13

千住 13

西荒井 13

三河島 13

西か原 13

禿屋敷 13

駕 13

神田 13

お玉か池 14

弁慶橋 14

筋違 14

八辻 14

柳原 15

藍染川 16

駿河台 16

九段坂 16

俎板橋 16

牛か淵 17

鎌倉河岸 17

おわりに 31

大門通 17

両国橋 17

矢の倉 18

柳橋 18

薬研堀 19

神田川 19

下駄新道 19

馬の鞍横町 19

舟宿 19

浅草 19

鳥越 20

花形の渡 20

駒形 21

並木 21

馬道 21

待乳山 21

三谷 21

今戸 21

吾妻橋 22

首尾松 22

橋場 22

真崎 22

浅茅か原 22

日本堤 22

衣紋坂 22

五十軒道 23

大門口 23

吉原 23

中田甫 24

千海苔 24

本所 24

豎川 25

五百羅漢 25

柳島 25

亀戸 26

梅屋敷 26

五本松 26

吾妻杜 27

三囲 27

隅田川 27

関屋里 28

業平橋 28

萩寺 28

白髭 28

牛御前 29

木母寺 29

葛西 29

木下川 29

割下水 29

中川 29

鱧 30

芭蕉記念館所蔵本

『狂歌江戸砂子集』について

芭蕉記念館は、これまで年度報告書として、所蔵資料目録のほか、館蔵品による図録資料を刊行してきた。ことに図録資料は資料整理を行うなかで、特徴的なものを紹介してきたつもりである。その作業の過程では当館の手写本と別本とを比較し、その資料的性格を明らかにすることが中心であった。

今回は当館で所蔵する木版本で『狂歌江戸砂子集』と題した一書を翻刻の形で紹介することにした。

『狂歌江戸砂子集』は、本来『狂歌江戸砂子集』（以下「正編」とする）上下二冊、『狂歌江戸砂子集 続編』（以下「続編」とする）上下二冊の合わせて四冊からなる。そのうち続編の下巻が、今回紹介する当館の『狂歌江戸砂子集』である。そこで二編四冊の記載内容をそれぞれ明らかにするなかで、資料全体の性格を考えてみたい。

二

芭蕉記念館本『狂歌江戸砂子集』は真鍋儀十氏の寄贈資料の一つである。国会図書館本では、『狂歌江戸砂子集 続編 下』の題簽があるが、当館本では『狂歌江戸砂子集』と筆書されている。それは題簽がはがれたことにより、便宜のために原題のみを記しておいたものであろう。

『狂歌江戸砂子集』は享保期に刊行された地誌『江戸砂子』から名前を取った狂歌集である。従って江戸の各地名を題に撰集したものであり、地域の特徴がよく示されている。

以下二編四冊の『狂歌江戸砂子集』について説明する。

○『狂歌江戸砂子集』

文化八年（一八一）刊上下二冊の半紙本である。編者は六樹園である。序文は千秋二世千首楼堅丸が記している。発行は東都書林 池之端仲町 須原屋伊八、神田鍛冶町 北嶋長四郎が行っている。

上巻は日本橋から極楽水まで、下巻は富坂から太神楽までと追加分が記載されており、狂歌数は計八九一首である。

記載内容は、序文の後に「江戸地名目録」が記されている。

江戸地名目録

六樹園飯盛	日本橋	江戸橋	四日市	新場	堺町	大門通
判 松風台停々	鍛渡	八町堀	新川	鉄砲洲	深川	木場
○						
千猿亭業枝	洲崎	佃島	本所	堅川	柳嶋	中の郷
者 蘭奢亭香保留	亀戸	吾嬬杜	梅屋敷	三囲	角田川	関屋里

千首楼堅丸

……………（後略）

これによると、各組（計六組）それぞれ五名の判者が、江戸地名二十四項目の選歌を行っていることがわかる。また江戸地名の他に「当座判者」が最後に付されている。

当座判者

奴東斎佐十	紫	花の屋道頼	四手駕籠
一斎千唐			
松雨堂小夜風	錦絵	鈍々亭和樽	江戸節
千筍亭雪伸	職人	雁々亭友貫	太神楽
		舞楽楼ともゑ	

これは江戸各地域の特徴である風物・名物を題として掲げたものである。本文では、各組地名の題のあと、続いて「当座」として選歌されている（表一段参照）。

また本文中各狂歌には、選歌時の得点表が次のように付されている。

狂歌江戸砂子四季雑混雑

六樹	松風	千猿	千金	千首
八十五	十	〇	七	日本橋

名に高き富士もちいさくみわたすは江戸の眼の日本橋かな
千 金 亭
……（後略）

以上のように「正編」は選歌の状況が具体的にわかる記載となっている。

○『狂歌江戸砂子集 続編』

文政九年（一八二六）刊上下二冊の半紙本である。編者は鈍々亭である。序文は西来居末仏が記している。発行は東都書林 神田鍛冶町 北嶋順四郎 馬喰町二丁目 西村屋与八が行っている。

上巻は日本橋から谷中まで、下巻は不忍の池から鱸までと追加分が記載されており、狂歌数は計一四五一首である。

記載内容は、序文の後にすぐ本文があり、正編のような目録および判者の記載はなく、本文中の得点表もない。しかし本文の配列や当座の題を設けることなどから、「正編」と同様の形式で「続編」も作成されたと考えられる。

また、「正編」下巻最後に「続編」刊行の記事がある。

狂歌統江戸砂子集
近刻 鈍々亭 蔵

従って、『狂歌統江戸砂子集』を編纂した時点で、すでに「統編」を刊行することが決まっております、実に十五年の歳月を経てようやく本編ができあがったのであろう。なお鈍々亭（和樽）はすでに文政五年七月に死去している。

三

次に「正編」と「統編」の記載内容を比較してみたい（表一参照）。表一は、正編と統編の項目を列挙したものである。同表は統編の記載順に正編を合わせる形で作成した。

両編の項目（「江戸地名」・「当座」）を比較すると、江戸東側地域の項目が多数「統編」に付加されているのが特徴である。柳原・業平橋・白髭橋などである。また、五百羅漢・五本松・萩寺・木下川薬師といった江戸名所も新たに増えている。さらに葛西・中川が加えられたことにより、地域もさらに東へ広がっている。このことは庶民の生活空間の広がりを意味する。

歌数は「正編」八八七首、「統編」一四五三首と六百首程増えているが、項目によってばらつきがみられる。十首以上増減した項目をあげてみる。

品川	28 (12)	青山	23 (6)	堀の内	23 (6)
玉川	42 (22)	日暮里	3 (16)	本郷	11 (1)
上野	49 (19)	山下	17 (0)	養輪	11 (1)
柳原	31 (0)	藍染川	13 (1)	両国橋	39 (13)
下駄新道	12 (0)	吉原	54 (27)	本所	26 (7)
亀戸	17 (10)	隅田川	40 (12)	萩寺	15 (0)
白髭	10 (0)				

右に記した十九項目のうち減少した項目は日暮里のみである。増加した十八項目のうち、品川・青山・堀の内・玉川を除く十四項目は江戸の東側に位置する地域である。

また「当座」の題をみると、紫・駕籠・錦絵などは「正編」から引き続き取り上げられているが、干海苔・鱧といった題が新しく付け加えられた。これらは隅田川を中心とした浅草、本所、深川の名物として知られるもので、この付近の江戸庶民の食文化を考え合わせるうえで、重要といえよう。

四

以上、簡単ではあるが、『狂歌江戸砂子集』について、「正編」と「統編」突き合わせる形で、資料の性格を考えてみた。

今回翻刻を行った芭蕉記念館本『狂歌江戸砂子集』（「統編」の下巻）は浅草・本所などの江戸東側地域を中心とした構成になっている。これは「正編」と「統

編」を比較するなかで、狂歌の題となる項目の増加など変化がみられた部分である。

なお細部にわたった検討は今後の課題としておきたい。

注

(1) 『狂歌江戸砂子集』四冊のうち、「正編」上下巻・「統編」上巻の三冊は、国会図書館所蔵本を参照した。

(2) 菊岡沾涼『江戸砂子』（享保十七年刊 統編 享保二十年 再校本 明和九年刊）、小池章太郎編『江戸砂子』（一九七六年 東京堂出版）。

(3) 『江戸砂子』から名を取った狂歌集は『江戸砂子紅塵集』（生花斎橘照道著 作成年代不明）がある。また狂歌以外でも、歌舞伎、絵本番付にもその名が使われている。（『補訂版 国書総目録』（一九九三年 岩波書店））

(4) 前掲書『補訂版 国書総目録』第一巻。

六樹園については、狩野快庵『狂歌人名辞書』（一九二八年 広田書店）「飯盛」によると「宿屋飯盛 姓石川氏、名は雅望、字は子利、通称五郎兵衛、浮世絵師石川豊信の男、六樹園。：（中略）：始め東都小伝馬町に住し、中頃四ツ谷内藤新宿に退隠し、晩年霊岸島に移転し、天保元年閏三月二十四日に没す、年七十八、浅草正覚寺地中哲相院に葬る。」とある。

(5) 前掲書『狂歌人名辞書』「堅丸」によると、「屋敷堅丸、別号千首楼、通称浜松清七。東都神田藍染川の北畔に住す、神田側判者社。」とある。

(6) 前掲書『補訂版 国書総目録』第一巻

鈍々亭については、前掲書『狂歌人名辞書』によると、「祭和樽、鈍々亭と号す、姓岡本氏、通称武蔵屋新六、東都神田小柳町の髪結職、初め三陀羅法師に学び、後太鼓側の頭目、文政五年七月没す。」とある。

(7) 前掲書『狂歌人名辞書』「未仏」によると、「西来居未仏、初号瓢箪園一寸法師。通称毛受照寛。名は善喜。東都市ヶ谷に住す尾張藩の医官、五側判者にして、後ち瓢箪連に長たり」とある。

(8) 注(6) 参照。

(9) 数字は「統編」狂歌数を、（ ）内数字は「正編」狂歌数を示す。

（担当 横浜 文孝 曲田 浩和）

狂歌江戸砂子集続編

狂歌江戸砂子集

狂歌江戸砂子集続編

狂歌江戸砂子集

狂歌江戸砂子集続編		狂歌江戸砂子集	
順番	項目	順番	項目
上 73	鶏声ヶ窪	下 9	庚申塚
上 72	巢鴨	下 8	大塚
上 71	駒籠	下 7	鶏声ヶ窪
上 70	富坂	下 6	巢鴨
上 69	極楽水	下 5	目赤
上 68	小石川	下 4	駒込
上 67	音羽	下 3	鶯谷
上 66	関口	下 2	丸山
上 65	小日向	下 1	富坂
上 64	赤城	上 83	極楽水
上 63	牛籠	上 82	小石川
上 62	○水茶屋	上 81	音羽
上 61	中野	上 80	関口
上 60	府中	上 79	小日向
上 59	練馬	上 78	赤城
上 58	猪の頭	上 77	築土
上 57	小金井	上 76	牛込
上 56	玉川	上 75	○当座
上 55	雑司ヶ谷	府中 1	四谷 1
上 54	堀の内	(追加)	目黒 3
上 53	淀橋	上 65	中野
上 52	目黒	上 74	府中
上 51	青山	上 73	練馬
上 50	筈橋	上 72	猪の頭
		上 71	小金井
		上 70	玉川
		上 69	姿見橋
		上 68	雑司ヶ谷
		上 67	堀の内
		上 66	淀橋
		上 64	目黒
		上 63	青山
		上 62	筈橋
首		首	

狂歌江戸砂子集続編		狂歌江戸砂子集	
順番	項目	順番	項目
下 12	西か原	下 65	三河島
下 11	三河島		
下 10	西荒井		
下 9	千住		
下 8	養輪	下 63	箕輪
下 7	坂本	下 62	坂本
下 6	根岸	下 64	根岸
下 5	三絃堀	下 46	三絃堀
下 4	下谷	下 36	下谷
下 3	根津	下 42	根津
下 2	向か岡	下 39	向岡
下 1	不忍の池	下 38	不忍池
上 90	谷中	下 40	谷中
上 89	山下		
上 88	上野	下 35	上野
上 87	妻恋	下 22	妻乞
上 86	御茶の水	下 34	御茶水
上 85	桜の馬場	下 19	桜馬場
上 84	本郷	下 21	本郷
上 83	湯島	下 37	湯島
上 82	○烟草入	下 20	湯島
上 81	蜷沢	下 17	○当座
上 80	日暮里	谷中 1	四手駕籠
上 79	道権山	飛鳥山 1	牛込 2
上 78	飛鳥山	(追加)	猫股橋 1
上 77	王子	下 16	板橋
上 76	滝の川	下 15	日暮
上 75	染井		
上 74	猫股橋	下 13	飛鳥山
		下 14	王子
		下 12	滝川
		下 11	染井
		下 10	猫股橋
首		首	

狂歌江戸砂子集続編		狂歌江戸砂子集	
順番	項目	順番	項目
下13	禿屋敷	下18	神田
下14	駕	下28	於玉池
下15	神田	下29	十軒店
下16	お玉か池	下30	弁慶橋
下17	弁慶橋	下41	藍染川
下18	筋違	下23	駿河台
下19	八辻	下25	九段坂
下20	柳原	下26	組板橋
下21	藍染川	下27	鎌倉河岸
下22	駿河台	下24	真菰洲
下23	九段坂	下25	組板橋
下24	組板橋	下26	組板橋
下25	牛か測	下27	鎌倉河岸
下26	鎌倉河岸	下28	大門通
下27	大門通	下29	矢の倉
下28	両国橋	下30	柳橋
下29	矢の倉	下31	薬研堀
下30	柳橋	下32	柳橋
下31	薬研堀	下33	両国
下32	神田川	下34	馬の鞍横町
下33	下駄新道	下35	舟宿
下34	馬の鞍横町	下36	浅草
下35	舟宿	下37	鳥越
下36	浅草	下38	花形の渡
下37	鳥越	下39	駒形
下38	花形の渡		
下39	駒形		
1	8	4	29
3	5	12	4
1	14	4	
39	9		
10			
2	5	11	10
13	31	9	5
4	26	3	5
下47	駒形	2	
下45	鳥越	4	
下44	浅草	28	
下31	薬研堀	1	
下32	柳橋	5	
下33	両国	13	
下6	大門通	9	
下43	当座	1	
根津1	藍染川1		
三絃堀1	神田1		
(追加)	両国1		
下27	鎌倉河岸	1	
下24	真菰洲	2	
下26	組板橋	2	
下25	九段坂	3	
下23	駿河台	4	
下41	藍染川	1	
下30	弁慶橋	4	
下29	十軒店	5	
下28	於玉池	1	
下18	神田	22	

狂歌江戸砂子集続編		狂歌江戸砂子集	
順番	項目	順番	項目
下40	並木	下40	並木
下41	馬道	下49	馬道
下42	待乳山	下50	花川戸
下43	三谷	下51	待乳山
下44	今戸	下52	今戸
下45	吾妻橋	下54	吾妻橋
下46	首尾松	下55	橋場
下47	橋場	下56	橋場
下48	真崎	下57	浅茅か原
下49	浅茅か原	下58	鏡池
下50	日本堤	下59	人目堤
下51	衣紋坂	下60	五十軒道
下52	五十軒道	下61	吉原
下53	大門口	下62	金杉
下54	吉原	(追加)	
下55	中田甫	吉原1	花形渡1
下56		金杉1	箕輪
下57		下63	当座
下58		下64	太神楽
下59		下65	
下60		下66	
下61		下67	
下62		下68	
下63		下69	
下64		下70	
下65		下71	
2	5	3	13
18	7	5	6
26	3		
6	54	4	1
6	6	3	3
6	7	2	11
10	5		
5	4		
下23	三囲	3	
下21	吾妻杜	5	
下22	梅屋敷	5	
下20	亀戸	7	
下19	中の郷	1	
下18	柳島	1	
下17	堅川	6	
下16	本所	7	
下15	本所	6	
下14	当座		
下13	太神楽		
下12			
下11			
下10			
下9			
下8			
下7			
下6			
下5			
下4			
下3			
下2			
下1			

[illegible]

芭蕉記念
館所蔵本

『
狂歌江戸砂子集
』

凡 例

一 芭蕉記念館所蔵『狂歌江戸砂子集』（狂歌江戸砂子集統編下巻）（昭和五十八年度報告芭蕉記念館所蔵目録Ⅱ―B―Ⅰ―三六 旧真鍋家所蔵）の翻刻を行った。

一 翻刻した全文は原則として原文の体裁を重んじた。

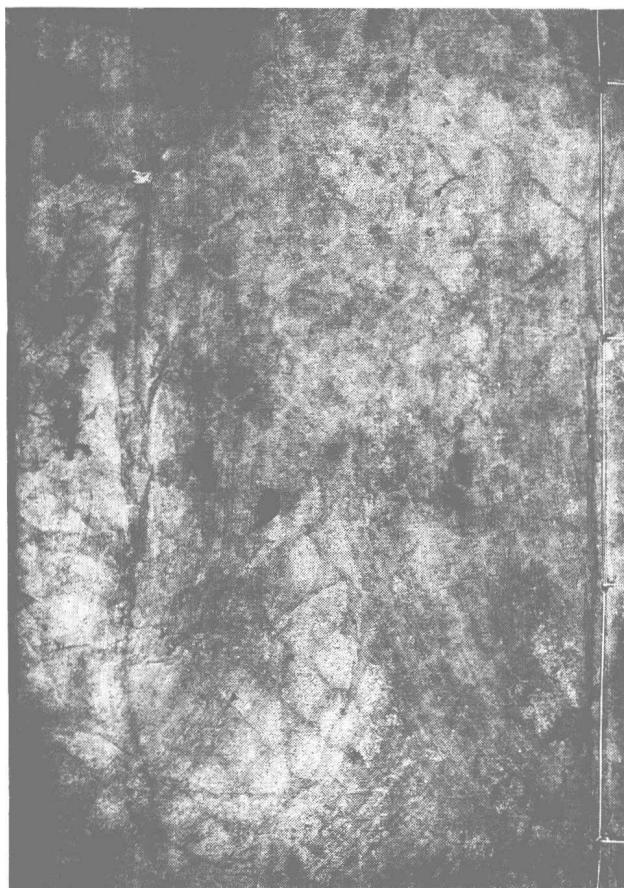
一 本文中の異体字・旧漢字・変体仮名は現在使用されているものに改めた。

一 誤字はそのまま写し、右傍に（ ）を用いて正しく字を入れた。また意味不明の字句・疑問ある字句などはそのまま記し、右傍に（ママ）と付した。

一 不読の字については、その字数分を□□で表記し、右傍に推定できる字句を（ ）を用いて補った。

一 史料の性格上、平仮名表記が多く、意味の取りにくいものについては、右傍に「 」を用いて漢字を補った。

一 作者について、雅号がわかるものは《狂歌江戸砂子集統編上巻》より、右傍にへゝを用いて補った。



不忠の地

[illegible]

私刑
由來

去芳

一 赤
長

檢
典

琴走

東聖子

春樹

不忍の池

しのハすの茶やのすたれの巻葉より浮葉へ糸のかよふさゝかに
不忍の蓮見て中におく露の玉をあさむく児もありけり

吹おろすうへのゝかねに不忍の池にもうこくはすの撞木葉

蓮の葉の露の玉をそちりハむる此しのハすの神のミヤしろ

声ひゝく上野のかねにはすの葉のしゅ木もゆるく不忍の池

しのハすの茶やかすたれもまきかけて青きをうちへたゝむ連葉

しのはすの池の出茶やハ連めしのふけるゆけにも露の白玉

しのはすのはすのうき葉の冬かれて足にいとなき池の水鳥

不忍の池のほたるも声せぬハ忍か岡の草や花しけん

しのハすの池の巳待の賑うてはすの浮葉にならふ青傘

不忍の池のかゝみに茶や女うへのゝ花の笑顔つくろふ

ほとゝきす忍か岡に哥人ハこよひそ夜さらひちかけの松

しのはすのいけに上野のさくら花うつりて下にミるもめつらし

鯉鮒もさらにミへぬはてる月の氷やとちし不忍の池

不忍のいけの鏡ハ大きくてうへのゝかねにいのこしにけん

向か岡

こゝにねて向か岡のすミれ草夢のうきハしかけてつまハヤ

日の影にむかひか岡や紫のいろにうすめる衣かけの松

根津

入日さす紅葉番所に色そへて夕かけになる片時雨そら

下谷

香製をひさく酒袋か軒ちかく二ふり三ふりあられたハしる

ゆたけさハ天か下谷に虫干のお具足町を吹通す風

山の名のめたつ下谷の小くら蕎麦もみちおろしや錦出の皿

百人もミせにならひて小くらそは花の下谷に客の哥ひさ

三絃堀

出格子のすたれの内の水調子さミせんほりへもれてゆかしき

五月雨のいとを軒端に三筋町さミせん堀へかよふ水音

根岸

杖となる竹の根きしの藪つゝき老鶯のこゑのかくれ家

青葉して花ハねきしへかへり行うしろ姿のミゆる藤寺

こゝも又東のひんの根岸村すめハ都にまけぬうくひす

紫の霞のいろもとりそろふ松の根きしをまとふ藤寺

鳴台の松のねきしの亀の尾のミのわにちかく遊ぶまな鶴

にるかたもなく冬の夜のうま事ハかもにねきしの寮にこもりて

坂本

さくらさく雲のうへのゝ花くもり雨のミのわに雪の坂本

〔竹窓〕

和 則

〔恒の屋〕

由都留

〔花柳亭〕

真 芳

一 窓

〔藤の屋〕

長 旅

〔至清堂〕

捨 魚

〔松の屋〕

琴 彦

〔聖庵〕

〔光丸〕

春 樹

〔龜桂樓〕

一 村

〔廻船亭〕

早 来

〔松の屋〕

花 成

〔重堂〕

真 弓

〔捨魚〕

萬々成

〔花柳亭〕

友 頼

〔珠々亭〕

糸 成

〔法昌庵〕

谷 住

〔射術庵〕

張 弓

〔桃錦園〕

織 芳

〔永代庵〕

持 丸

〔春の屋〕

成 丈

〔春風亭〕

梅 香

〔白毛寺〕

萬 守

〔珠々亭〕

糸 成

〔香蓮庵〕

道 文

〔柳葉園〕

菅 簀

〔福の屋〕

内 成

〔和庵〕

和 則

簑輪

うかれ女か身をしる雨のミの虫やミのわの寮に父よとそなく
正灯寺そむる時雨のうすもミち色をうつせるミのわかハラけ
むら雨のはるゝミのわの時鳥月の笠もる今の一声

夜さらうつ紙の砧のつち音もしめるミのわの宿のさひしさ

とりあけてひんの簑輪に早をとめの草しらぬにもしつか若苗

大江戸の土用見廻に親子つれミのわの里を出新芋

うしろむくミのわの地藏よしハラにまよふ衆生ハすくハれしとや

雨にきるミのわにそたつ撫子ハミめよし原のやしなひの花

さく梅の笠にゆかりのミのわにハ旅鶯もとうてきぬらし

とり出すミのわハはれて夕立の雲の根きしや道なしの辻

はれ間をもまたぬ所か花すゝき笠にミのわの里のむら雨

千住

江戸入の花ともミへし奥大名一目千しゆにつゝく伊達鎗

西荒井

西あらる稲の浪間にしらほてふ紙すき千せる舟板もミゆ

三河島

八つ橋に板をわたして霜とけの道をくもてにゆく三河しま

万才の出さる東の三河しま素襖の紋の鶴そおりたつ

かきつハたこも名におふ三河しまさく紫の花の大江戸

狂歌子

文丸

西か原

貞岡

喜蝶

西方の西か原もゆるゝと春のひかんの六あミた道

内成

和則

禿屋敷

全

夏草ハふりわけ髪や筒井筒かふる屋しきの花の撫子

美左古

菅簑

三つならふ橋さへあるを三筋のけころハしたにたへし山下

六樹園

広記

はゝき女の目たつ根岸の奥ふかくゝハうき世のちりもなき寮

北斗庵

青雲亭

見物の目をぬきながら放下師も口やしなひに出る山下

空満屋

丸記

たから物持たる人の隠れ里訪ひてミのわに笠やとりせん

芍薬亭

月照

駕

二喜

米守

きぬゝををしむ泪の四つて駕たれの袖をも引しほりけり

鈍々亭

梅満

花の雪いかゝミるそと里かよひすたれかゝけてのる四つ手かこ

催馬

道文

落としたる物ハかりかハ戸なし駕くたひれ足もひろハさる御代

道文

神田

真芳

西村と銘をまかねにうち神田かち町の名もひゝく大江戸

逸窓

米守

紺屋丁あつらへものゝ松葉すり是も時雨の染かねそする

簀風館

米守

仲秋のそら行雁のいくたり今川橋に文字やなすらん

占正

簀風館

風おくるふいこの窓にいなつまの光りかよふとミゆる鍛冶丁

蔵積

内成

わすれてもくむな思案の外神田禁酒の目にハ毒の玉川

夏躬

内成

はたつものめならふ籠に飼鳥の連雀丁につゝくきし丁

万守

稲の穂のかさなりあへる見物や神田の祭出来のよきとて

むら雲の袖をとほして一つらハ連雀丁をわたる雁かね

帯ときに参る神田に跡たれし小袖のすそのそろふ子宝

そらいろののれんをかけてしとゝめの星をならへし菊岡か琴

筋かひにならふ内田と玉川にさらして布をしほる白酒

けふりたつ民のかまとの賑わひも秋の田丁にしるゝ朝市

子を思ふ親も一日祭りにハひかされて行きし丁の出し

薄霞油煙のやうに立のほるらふそく丁の春の曙

上水の神田ハはかる味酒も升へとかゝる玉川のミセ

下駄のはの跡に二くつし三くつし雪にも形をおく紺屋丁

節分をいはうて鬼ハ外神田福ハ内田の酒をこそくめ

にきハしな夜宮のさゝき灯台のらふそく丁や昼をあさむく

春めきし東神田ハ霞たちさくらの池もしらむ曙

かち丁にさむさきたへて内神田軒のつらゝをつるさかとみん

三河丁とく玉さへも八橋のくもてにくハる万才扇

須田丁にひさける梨の沫雪もつめハたわめるくれ竹のかこ

受あうて逃ぬ気性ハ所からそこか神田のたて大工丁

天つたふ東神田にそら高く曙染をほすこんや丁

あつらへもはれぬ日和にこんや丁雲の衣もきにかゝりぬる

祭礼にあらねと神田明神ハ太鼓の音のしけき楊弓

捨魚

お玉か池

蔵積

古池のお玉杓子もすむ水にかへる手の飛ふ風のもミちは

鈍々亭

和則

水仕女のお玉か池の袖垣にたすきをかけてうつる雁かね

全

夏躬

池の名にのこるお玉かおもかけを今もミとりの青柳の髪

内成

喜樽

水ぬるむ小春となれハ時しりてお玉か池にうかむ蛙手

喜蝶

真弓

弁慶橋

全

力ある風よあつまのひえのかね弁慶はしにもて来る声

鈍々亭

蔵積

地割にハ七つ道具ハいらすして弁慶橋をつくる小左衛門

一葉

織芳

立ちむかふ弁慶はしもかはほりの扇にとハす長刀草履

二喜

種成

鯨鯨の七つ道具もならへけり弁慶橋の雪の煮うりや

友数

内成

世にひゝく弁慶はしへ引あくる人の力のつりかね建立

升成

成丈

筋違

直正

綾重

千早ふる神田にまつるとし徳の恵方につれる棚の筋違

内成

梅風

山の手にさける花をもよそにミて筋かひに行春の雁かね

内成

梅満

番人の坐もきまりある升形にかけたるつるの筋かひ見附

哥道

夏躬

片時雨はれ間に傘をかたむけて夕日のかけの筋かひにさす

星丸

花成

人をさへ神田祭りにはかるらんつるかけ升の筋かひのはし

越人

清女

八辻

美左古

真弓

すちかひにあやとる砂か打網も八辻に末のわかるいと口

笠人

糸成

ふりつミて人も八辻の出はひりハすちかひにつゝ雪の中道

うかれゐて鐘も八辻にふけわたる夏ハすゝしき月の水茶や
 蜘蛛なる道の八辻ハ金柑もあミをかけたる水くわしやミセ
 行ちかふ四つ手のかこのかけ声も四方にわかるゝよるの八つ辻
 すさのをの御こし出る日ハをろちほと八またにわかる辻の賑ひ
 師匠よりかへる寺子も明日と八つにわかれてはひる辻々
 すちかひに草紙セおうて手習子八つにわかるゝ永字八ほう
 筋かひにむすふ四辻のさけ帯ハ八辻の茶やにやすむ茶やつし
 柳原

床見セの蛤つまの小袖にも砂をはます土手の追風
 古着をもひさける糸の柳原あたらしとよふ橋の名もあり
 柳原古手買にハ隣とくねもかたりあふミのや近江屋
 あきものゝ数珠に緒に柳原いともてぬける玉ハミへけり
 柳原花田の帯の糸おりも一筋つゝにのひる掛ミセ
 柳原もへき小紋の古手さへ春ハ霞にめをひかせけり
 やなきハラ木かけにひさくふるものゝ鼠かへしやかうもり羽織
 鞠ほとにけのこる雪の柳ハラ衣紋になかす軒のしたゝり
 ととき衣の柳のいとに初雪のわたも飛する土手のかけミセ
 春の日の柳原とていと長く小袖もすそをたるゝ床ミセ
 柳原たれたる枝の髪に象股引もつなく床ミセ
 秋風のこゑたてゝよふ古着店葛の合羽のかへるうら袖

捨魚	ちりそめて秋しる軒の柳原ひさく古着も千草百草	美左古
和則	江戸絵図にミつゝちまたの柳原いくすちとなくわくる枝道	和則
裾住	柳原まゆつくりつゝ春の夜の臘にたちてまねく辻君 クマカヘ	山桜亭 （書生）
成丈	柳ハラ軒端にたるゝ糸おりもやハリたよわくミゆる古衣	名丸
真芳	細布をかふも別れのかたひさしむねのあハさる土手の床ミセ	万守
万守	柳ハラ古手古本古道具あたらしものハ橋の名ハかり	成丈
笑寿	ほしミセの軒にさけたる柳原小柳の帯糸おりの糸 鶯の初音の馬場の乗くらの星もちらせる青貝の梅	谷住
広記	柳ハラ長しけ雨のふるてミセはれ着にならぬ土手のしろ物	石根
起人	古手ミセもやう小袖にさけ髪姿も枝にミる柳ハラ	知呂利 （銅古庵）
蟹記	古着うる土手の柳のいとなミヤ口の車にかけてあきなふ	楽聖庵
一四窓	手入せし去年の古着の花田帯染かへしてはうる柳原	裏丸 （福辺庵）
内成	柳ハラ春ハ糸をもよりとりやミとりをなして十九文ミセ	崔成 （鮎亭）
月庵	もやひつな洗ふ木かけのいつミ橋袂に風をいるゝ夜すゝミ	菅簀
文齡舎 （龜丸）	むかし染柳のもやうそめ直し新橋にかくる古着屋	住安
川人	ふけハ飛ふ羽おりのさまよ柳原七つ過なる風のかハほり	文丸
和則	柳ハラ門ことに袖はらふらんつもれる雪のふる着ミセにハ	松成
笠成	柳原柳ハ軒のけつりかけ霞も春の棚おろし前	美副
裏丸	猿沢の池ならなくに柳原をうなの衣もかゝる床ミセ	月照
和則		